様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００３６４

研究課題名（和文）美女と戦争――抗戦期中国の通俗小説に見る民衆の嗜好

研究課題名（英文）Beauty and War: Popular Tastes in Pulp Fiction during Wartime China

研究代表者
杉村　安幾子（SUGIMURA, Akiko）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：５０３３４７９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は1940年代の通俗作家徐クと無名氏の作品を対象として、抗日戦争期における美女表象を分析したものである。
研究成果としては、以下の2点を指摘した。1点目は作品中の美女たちの死が二つに大別されることを明らかにしたことである。即ち、男性・家父長制によって犠牲になった受動的な運命、もう一つは愛国・民族のために自ら選択した主体的な運命である。2点目は、通俗小説とされる作品には、弱者がより弱者の立場に追いやられるという構図が見られるという指摘である。男性たちの大義名分の蔭で、不幸に陥る美女たちの系譜は、実は中国文学の伝統の中にも見出せ、今後の研究の進化・深化により中国文学研究全体への貢献につながる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中国本国では二項対立的な雅俗概念によって下位に置かれがちな通俗小説について、1940年代の作品分析を通じて抗日戦争期の読者の嗜好が明らかになった。それは、男性主人公の大義名分の下で、美しい女性登場人物はほぼ必ず不幸に陥るという特徴である。女性登場人物の美貌に課せられた不幸な運命は、民族主義的愛国心を強く鼓舞する役割が負わされている。こうしたジェンダー化された運命は、文学と政治が密接につながっていることを物語っているだろう。1940年代中国の通俗小説やジェンダー表象およびそれらの政治性に着眼した研究という点において、従来にない視点の提供となっており学術的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This study presents an analysis of the portrayal of beauty in the works of popular writers Xu Xu and Wumingshi during the period of the Anti-Japanese War in the 1940s. As the research outcome, two significant points are delineated. Firstly, it elucidates the bifurcation of the deaths of the beauties within the narratives. Namely, the passive fate dictated by male patriarchy and, conversely, the active destiny chosen for the sake of patriotism and ethnicity. Secondly, it remarks upon the observation that works categorized as popular novels often depict a scenario where the weak are further relegated to positions of vulnerability. The lineage of unfortunate beauties, as discerned, resonates within the traditions of Chinese literature, thus paving the way for further evolution and deepening of research, ultimately contributing to the broader field of Chinese literary studies.

研究分野：中国文学

キーワード：戦争　美女表象　通俗小説

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、中国の現代文学史が読者の絶大な支持を得ていた通俗小説を無視してきたことと、中国の通俗小説の女性主人公が美女ばかりであるという 2 点に着目したことを起点としている。通俗小説には読者を惹き付ける魅力があり、それゆえに多くの支持を集めた一方で、文学史上では酷評か、或いはないも同然の扱いを受けてきた。こうした現象については、時代性と政治性双方の観点から研究される必要があると考え申請に至ったものである。本研究は、申請者の前プロジェクト（学術研究助成基金助成金・挑戦的萌芽研究「中国現代文学における通俗小説――Xu Xu・Wumingshi を中心に」課題番号：15K12869）の研究成果を承け、内容的には連続した研究となっているが、更に一歩踏み込で研究することで、より発展的な成果を目指すものとした。

本研究が特に注目したのは、1940 年代中国の通俗小説家の代表とも目される徐訏と無名氏の作品である。中国の 1940 年代は、抗日戦争と国共内戦を経、中華人民共和国建国に至る歴史的大変動の時期であり、文化的状況も新旧双方の価値観が存在し時に衝突する中で、文学作品の多様化も進んでいた。徐訏と無名氏の作品については、現在では既に一定程度の研究の蓄積も見られるが、その研究史にはまだまだ多くの余白が残されており、質量ともに充実した研究成果が期されていた。

２．研究の目的

徐訏・無名氏の二氏は「通俗作家」と見なされており、それぞれの評伝・専論においては、以下の 3 点が共通する。①特定の文学流派に属さなかった、②活躍時期が戦時であったにも関わらず、作品中に戦争の影がないか、或いはほとんど見出せない、③長期に亘り社会主義的アカデミズムから無視され続けた。また、二氏は互いに交流はなかったものの、その作風の近似により 1940 年代の「双子的存在」の作家として言及されることが多い。しかし、1940 年代当時、大都市を中心とした多くの読者がその物語の展開について夢中で話題にし、文化大革命期(1966-76)も筆写本が秘かに知識青年の間で回覧され、彼らの熱い涙を誘った（范伯群著『中国現代通俗文学史』北京大学出版社、2007 年）ことに鑑みれば、中国学術界の徐訏・無名氏に対する姿勢はいまだ社会主義イデオロギーの下にあると言ってよい。こうした評価は、戦後、徐訏が香港へ、無名氏が台湾へ渡ったことと無関係ではない。香港の司馬長風の『中国新文学史』（香港昭明出版社、1978 年）は、徐訏・無名氏への中国文壇の態度を「冷遇・差別」と断じているほどである。本研究は、そのようなイデオロギー色の濃い中国学術界とは物理的にも思想的にも距離のある日本において、申請者が外国人ゆえの研究を通して、中国現代文学史への新たな視座の提供を目指した。

申請者は、徐訏・無名氏の作品の共通点として以下の 4 点を指摘する。

（１）美男美女による悲恋が主軸（女性主人公は多くの場合、最終的に自死或いは病死等）
（２）奇想天外な展開（ジェットコースター的、次から次へと様々な事件が起こる）
（３）西欧的異国情緒（外国が舞台であったり、外国人が登場人物であったりする）
（４）庶民生活とは乖離した貴族的都市文化（西洋音楽・絵画・演劇などが紹介される）

中国本国における徐訏・無名氏研究においても、上記 4 点のうち何点かは論及されることがあるが、4 点全てを二氏の共通した特徴として分析・考察したものはない。本研究は、この 4 点のうち、特に（１）を研究の中心に据え、二氏の作品分析を試みるものである。とりわけ、ほぼ必ず「女性主人公が美女である」と設定されている点を重視する。主人公が美男美女であることそれ自体は、古今東西の文芸作品に共通しており、中国文学の専売特許ではないが、1940 年代中国通俗小説に限ると、二氏の小説のほとんどは「女性主人公が美しければ美しいほど悲劇的結末が盛り上がる」という構造を備えている。戦争作品における英雄表象は、結末が悲劇であることで読者の愛国感情を強く掻き立てるものであるが、美女がその対象となると、そこには「美貌の消費」というルッキズムの観点と「他人の悲劇は娯楽である」の 2 点を指摘できるだろう。即ち、抗戦期の 1940 年代という時代的・社会的文脈に置き二氏らの作品を精読することで、二氏らの作品の存在意義をとらえるのみならず、戦時期の通俗小説の大きな特徴を見出すことが可能となる。結果としてそれは、当時の民衆が何を求めていたかという文化嗜好の問題、通俗文学の存在意義の指摘に繋がり得る。

３．研究の方法

本研究は、1940 年代のベストセラー作家である徐訏・無名氏の通俗小説について、「美女表象」を通じた「通俗性」の学術的検証を行なった。そこから、文学における民衆と戦争の関係性を炙り出し、純文学ではないとされる「恋愛譚」や「通俗小説」といった単純な二項対立的文学雅俗意識や社会主義イデオロギーから自由な、新たな学術的観点の提供を目指した。具体的な研究の方法は以下の通りである。

（１）徐訏・無名氏の小説作品における「美女表象」考察

物語・登場人物・事件・結末などを類型分類し、それらの類型と二氏の作品が民衆から強く支持された理由を考察した。具体的には上記２．で前述した 4 点をより細分化・類型化し、それぞれの意義や、読者であった民衆にアピールした意味を分析する。特に女性主人公の美貌に課せられた意味の考察に重点を置いた。そこから 1940 年代の通俗小説における女性主人公の美貌には、単なる恋愛譚の常套ではなく、強い政治性を帯びた意味が見て取れることを指摘した。

（２）徐訏・無名氏の小説における戦争と政治

徐訏・無名氏は既成文壇において「作品から政治・戦争を排した」と評され、その点からも「通俗作家」の地位に貶められてきたが、精読すると厳密には戦争・政治は排されておらず、作品の重要な後景となっている場合が殆どであり、また完全に排されていたら起こり得ない展開であることも多い。上記（１）の美女表象との関わりで、同時代の他作家作品との比較対照を通し、戦時の美女表象考察から作家と政治・戦争との関わりを析出した。

（３）二氏の作品の比較から見る 1940 年代通俗文学の意義

既述のように、徐訏・無名氏間に交流があったことを示す資料はないが、二氏は「双子的存在」の作家と見なされてきた。共通点は多いものの、決して作風の似ているわけではない二氏の作品を系統的に比較し、上記（１）（２）とも関わらせた上で、抗日戦争の激化していた 1940 年代の中国において、通俗小説が一大ジャンルであったことの意義を明らかにすることを目指した。

４．研究成果

4 年間の本研究においては、研究テーマに直接関連する論文を 5 本執筆発表した。

無名氏の作品論である「無名氏『塔裡的女人』――逆照射される男性性失墜の物語」（2021）は、作中で絶世の美女とされたヒロインが、男性主人公の思いやりと気遣いに見える差配により失恋し、結果として不幸な境遇に陥るさまが描かれるが、それが逆説的には男性主人公の意識下の強い家父長的封建性を鮮やかに照らし出した点を考察した。

徐訏については、「「美貌」というスティグマ――徐訏『風蕭蕭』における美女表象」（2021）において、『風蕭蕭』の美貌の女性諜報員たちが命を賭して諜報活動をしているが、彼女たちは自らの「美貌」こそが武器であることに自覚的であり、且つ又「美しく若いうちにしか価値はない」ことを自認して命を投げ出していることを指摘した。ここにはルッキズムとエイジズムを見て取れるが、美女諜報員たちの美と若さは、又同時に死が約束された徴でもある点を検証した。

「徐訏「幻覚」試論――無名氏作品との関わりで見る感傷に浸る男たち・葬り去られる女たち」（2022）においては、徐訏の短篇小説「幻覚」と無名氏の代表的長篇『北極風情画』『塔裡的女人』とのプロット上の酷似を指摘した。三作ともに男性主人公が恋人である女性を捨て、女性が自死或いは不幸な結末を迎えたことで、男性主人公が揃って出家・隠遁の道を選ぶという共通点である。論文中ではこの共通点の指摘と分析を通じ、男性主人公が悲恋の感傷に浸る姿勢の裏には、自らの恋と引き換えに得たものの価値を高めている功利的な心性があることを検証指摘した。そして、これらの作品が一見「悲恋小説」に見えるものの、そこにはヒロインは不在であり、男性主人公の自己完結的な自己形成物語しか見出せないという結論を導いた。

同テーマにおける比較軸として、他作家の作品も分析対象としたものが「楊振声『荒島上的故事』における自死する少女」（2023）と「不幸を嘆く女たち――予且「浅水姑娘」試論」（2024）である。前者は、作家楊振声の文学史上の地位、「荒島上的故事」の主題や創作意図が徐訏・無名氏とは大きく異なるものの、戦争と美女の悲壮な運命が描かれている点において、徐訏・無名氏の作品と共通しているとして分析対象とした。「荒島上的故事」においては美女の壮絶な自死が描かれるが、それには英雄的精神が託され、それには作品発表当時の読者の愛国心・民族意識を強く鼓舞する狙いがあったことが明らかである。この楊振声の作品を補助線としたことで、徐訏・無名氏の作品分析にも大きな助けとなった。

後者の対象とした作品は、ヒロイン格たる浅水の生き方を物語の主軸とし、彼女の母親や女学校の同級生たちも細かく描き、当時の中国社会における女性の生きづらさに焦点を絞っている。論文中、彼女たちの生きづらさを分析し、1940 年代中国の多くの通俗小説において女性が悲劇的な運命を与えられるのが一般的であった中で、『浅水姑娘』に登場する女性たちも、広い意味ではそうした悲劇の女性たちの姉妹であると結論付けた。

これら個別の研究成果からは、1940 年代の作品中の美女たちの死が、男性もしくは男性が象徴する家父長制の犠牲となったものか、民族の敵の手にかかった悲惨な運命として描かれたものと、愛国・民族のために自ら選択した悲しい結果として描かれたものとに明確に大別されることが明らかになった。そこにはジェンダー化された視点がある。更には文学作品、とりわけ通俗小説とされる作品には、弱者がより弱者の立場に追いやられるという構図が見られることも明らかである。男性たちの大義名分の蔭で、命を落とす、或いは正気を失う美女たちの系譜は、実は中国文学の伝統の中にも見出せるものである。今後は視点を中国文学全体に拡大することで、文学作品における美女たちの悲劇的運命が負ってきたものについて考察を深めていきたい。

また、本研究のテーマに直接的に関わるものではないが、徐訏・無名氏と同時代に活躍した作家銭鍾書の青年期の言動の中に、女性への蔑視とも呼べる眼差しがあることを論じた研究論文「銭鍾書と呉宓」（2021）も執筆し、間接的に当該時代が共有していた空気を論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 杉村安幾子	４．巻 73
２．論文標題 不幸を嘆く女たち――予且「浅水姑娘」試論	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本女子大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 115-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 杉村安幾子	４．巻 第72巻
２．論文標題 楊振声「荒島上的故事」における自死する少女	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本女子大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57483/00003614	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 杉村安幾子	４．巻 第71巻
２．論文標題 徐ク「幻覚」試論――無名氏作品との関わりで見る感傷に浸る男たち・葬り去られる女たち	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本女子大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 95-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 杉村安幾子	４．巻 40
２．論文標題 「美貌」というスティグマ――徐ク『風蕭蕭』における美女表象	５．発行年 2021年
３．雑誌名 お茶の水女子大学中国文学会報	６．最初と最後の頁 27-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 杉村安幾子
2．発表標題 語らぬ少女の語るもの――楊振声「搶親」と『独立評論』
3．学会等名 吼えろアジア：東アジアのプロレタリア文学・芸術とその文化移転1920-30年代（国際学会）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 宮尾正樹教授退休記念論集刊行会編	4．発行年 2021年
2．出版社 東方書店	5．総ページ数 439
3．書名 文学の力、語りの挑戦	

1．著者名 中国モダニズム研究会編	4．発行年 2021年
2．出版社 中国文庫	5．総ページ数 441
3．書名 夜の華――中国モダニズム研究会論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関